帯広圏デジタル化推進協議会　アドバイザリーボード
第４回会議　議事概要

日時：令和５年９月５日（火）
13 時 30 分～15 時 00 分
場所：帯広市役所 10 階第３会議室

１　議題１：「ウェルビーイングの取り組みについて」

・はじめに、配布資料について事務局より説明し、次のとおり意見や質疑を行った。要旨は以下のとおり。

神尾委員長

・事務局から原案イメージの事前送付があった。原案イメージは、本構想や戦略策定の背景に始まりローカルハブ、ウェルビーイングに続く構成となっている。今回は「ウェルビーイングの取り組み」「全体的観点で KPI の設定」「キャッチフレーズ」を中心にコメントやアイデアをいただきたい。

委員

・ウェルビーイングは概念が非常に幅広く、原案イメージにおいても「福祉」から「教育」、「防災」、「行政」など幅広く触れられている。「高齢者福祉」と「防災」についてポイントをあてて意見する。

・「高齢者福祉」について、自身が住む地域の町内会長を務めている経験からも、高齢者が過ごしやすい地域づくりの視点は重要と感じる。高齢になっても暮らしていける地域づくりを進めることは、若い世代に対しても地域に住み続ける安心感に繋がると思う。

・資料１中の「高齢者見守りへの ICT 活用」は、情報を集約することと、実際の見守り者は必ずしもイコールでなくてもよいと思う。見守りについてのラストワンマイル的な部分の作業を地域の自治会や町内会と分担・連携することも必要。自身が住む地域では、各自が元気か否かをカーテンの開閉で知らせる取り組みを実施している。こうした取り組みと ICT を組み合わせた仕組みが作れるとよい。

・高齢者の買い物難民についても課題と感じる。学生がサークルを作り自主的に高齢者の買い物を手伝ったりしているが、高齢者の数から比べたら規模が小さい。こうした課題は「遠方の親戚」よりも「近所の他人」の方が役にたつ。プライバシーを守りつつ ICT を使った仕組みが構築できたらと考える。

・高齢者にとって、定期的に通院し薬を受け取ることは負担である。事前に調剤 DX 関連に関する資料を送付したが、帯広圏においても、特区を活用するなどして特例的に実施し、こうした取り組みで、医療側も市民側もお互いにプラスとなることが実証できればと思う。

・帯広圏においても除雪に対する意見が一定数あると思う。事前に岩見沢市の除雪の事例を送付したが、こうした技術を活用して除雪作業の改善に取り組めればと思う。
・課題解決のために都度、委員会や会議を立ち上げるのは負担が大きい。新潟県の旧山古志村のデジタル村民の事例のように、地域を支援してくれるアイデアを持った人たちと日常的に集まり、課題に対する意見をもらったり資金を出してもらえるような枠組みとして、常設的なアドバイザリーボードがあると様々な場面で有用ではないか。

神尾委員長

・高齢者の住みやすさや暮らしやすさ、幸せ度が地域全体のウェルビーイングに繋がるというのは同感。全国的には自治会や町内会といったコミュニティが、結構活発に様々な活動や取り組みを展開している印象がある。
・山形県鶴岡市においても、薬の輸送に課題があり薬事法の関係を含め、薬のタイムリーな配達について実験を始めたところ。関係者がストレスにならない様にうまくデジタル技術でサポートができるとよい。
・薬の輸送については、現状の課題感はいかがか。

＜委員＞

・市街地は医療機関が比較的密集しているが、農村部は一定の困難さががある大変かもしれない。

＜神尾委員長＞

・事務局側で、何か補足や意見はあるか。

＜事務局＞

・帯広市でも町内会への加入率が下がってきており、課題感は持っている。高齢化が進んでいる中、どのようにデジタルを使って貰うか、という点も課題である。

神尾委員長

・デジタルに詳しい人が一人でもいて、アナログとデジタルを「繋ぐ」役割を果たしてもらえるとよい。
・自治会、町内会の状況について帯広市と３町で差異はあるか。

＜事務局＞

・同様の傾向にあると認識している。

委員

・町内会については、学校の部活動の地域移行のように、ある程度濃淡を付け、地域が担う部分とそれ以外を切り分けて、負担を軽減していくことが必要ではないか。その際の町内会の役割として、高齢者の見回りや地域防犯等があげられる。

委員

・デジタルを活用し「医療」、「福祉」、「子育て」などの住民サービスを、どの様に維持・継続していくかが一つの論点。その中で、担い手が減り財源も無いなかで、どのようにエコシステム化していくかが一つのテーマである。こうした課題について、これまではお金や人の力を使って繋いでいたが、今後はデジタル技術を使ってどのように繋ぎ合わせていくかが必要。

・「福祉」と「子育て」など異なる分野を繋げる事を検討する際には「誰」を中心にして考えるかを決めた上で、整理することが良い。例えば、「福祉」の分野では、障害者や高齢者の方など属性によりサポートする機関が変わる。一方で「子育て」の分野では、子供を中心として、学校や児童施設、病院等のカテゴリーがある。こうした場合の整理軸として、検討したサービスを「なぜ」やるのか、サービスを実施した後に、「何を実現したいのか」という軸を持ってサービスを検討すべきである。

・デジタル化によりパーソナライズする観点で考えると、個人の体調や環境に合わせた医療福祉サービスの実現を目指したりできる。例えば、今後、病院のベッド数が減り医師不足が進むことが考えられるが、それに対しオンラインで初診まで出来たり、オンラインで薬を処方できたり、薬の受け渡しも個々に合わせて色々な選択肢がある仕組みができればと考える。

・「教育」分野についても「将来的な仕事」や「志向性」に基づいて学びの環境を用意する観点で考えると、やはり、個人に合わせた環境を用意することができる。例えば、塾や学校などのデータを繋げながらサポートするような形も考えられる。

・「子育て」分野についてはこども家庭庁の動きがある。

・「福祉サービス」分野は、少子高齢化時代において、ニーズとリソースをマッチングさせる仕組みどのように作るか。例えば、地域の人が人力で取り組むには限界があるので、電力会社が検針にいったついでに見回るとか、何かシグナルをキャッチ出来る仕組みができればと思う。

・全体最適で重要なのは、サービスを単純にデジタル化するだけでは無く、地域のリソースを他の分野も含めて繋ぎ合わせ、地域の課題にミートさせることである。

・原案イメージのウェルビーイングに関する取組概要として「デジタル化による住民の利便性向上や行政の効率化が見込まれる～」として分野の記載があるが、「なぜ」が必要だと思う。各分野において、利便性向上とインフラ維持コスト低減の２つは必要。「効率化」「高度化」が求められる理由は、ターゲットを絞り一旦整理してみてはどうか。「誰」を中心にサービスを展開していくか考慮しターゲット設定してみてはどうか。また、選定理由にエビデンスを付けると、説明がしやすいと思う。

神尾委員長

・パーソナライズ向けのサービスについて、リソースの提供等をきめ細かく提供していく必要あるが、一方で体制やリソース不足がある中で、デジタルの力を活かし各分野の横断的な全体最適化を設計し、繋げていくこと必要。

・事務局の方で、具体的なターゲット層やサービスについて意見はあるか。

＜事務局＞

・基本的には他自治体の成功事例を「横展開」していく事を考えている。選定理由については、デジ田の取り組み事例を基準に、分野分けについては受益者の視点も踏まえ検討を進めたい。

神尾委員長

・デジタル化を進める「根拠」や「背景」については重要な指摘。

・将来的に帯広圏の人口動向や生活者のイメージを踏まえたうえで、デジタル戦略の「中身」について優先順位をつけて組み立てていくことが重要だと感じた。デジタル化を進めることで単純に全てが良くなるわけではない事もポイント。

委員

・帯広圏の人口分布を市街地と周辺地域に分け、それぞれの地域の学校、病院、公民館などの施設やそこに従事する人の充足を評価し、不足がある場合誰がカバーに入れるか整理することは次の論点としてありえる。これらについてインタビュー等を実施し体系化できると良い。

神尾委員長

・客観的、科学的な根拠をもとに各分野のデジタル化の判断を進めるために、デジタル戦略の「分科会」を作り、その積み重ねで全体の構想を作っていく等の手法もありうる。ご指摘を事務局も含めて受け止め、対応を考えていく必要がある。

＜事務局＞

・協議会の中では、デジタルと親和性の強い「子育て」分野を最初のターゲットとすることがよいとの意見があった。また、委員指摘のとおり、命にかかわる「高齢者」の分野もＩＣＴを活用し、特に離れた家族が確認できるシステムを優先的に検討していきたい。また、未来の世代に対する「教育」分野についても意識して取り組んでいきたい。

・ウェルビーイングの根本である「健康」分野については、帯広の食という観点からも、ローカルハブとの繋がりは比較的、納得感があると感じている。

神尾委員長

・帯広圏のデジタル戦略を検討する中で、広域の取り組みはサービス選定を同一にするのか、違うサービスにするのか決めることで、リソースが不足する地域を上手く補完できたりすると思う。個人に対し「医療」「教育」等の分野を横串的に検討する場合、デジタルサービスの効率的な提供方法を検討する必要がある。

・地域のデジタル化を推進するには既存の活動のデジタル化をうまく支援し、リソース間の連携や分野毎のサービスと行政のデータ等をうまく繋ぐ構造を検討する必要がある。農の分野

においては、農家における「移動」「教育」「就業」「働き方」「実際の生活パターン」などをデジタルの力を借りてトータル的なサービスを提供できればと思う。

・こうした取り組みについて、帯広圏で新たな手がかりやブレイクスルーポイントを示す事ができれば、全国的にも参考になる計画・戦略になるのではないか。

２　議題２：成果指標（ＫＰＩ）について

神尾委員長

・デジタル戦略について目標感を持ち進めていくにあたり、成果指標（KPI）の設定について意見をもらいたい。

委員

・人口が減るなか、どのように目標にたどり着くか。従来の発想から転換が必要。

・総合計画に示しているKGI、KPIをゴールとし、それにデジタルがどの程度寄与しているかの観点で整理することも一軸としてはある。

・二軸目は、5年後の数値を一旦設定し、そこに至るまでのデジタルサービス利用者を毎年の目標値として設定し、計測してくこと方法が最近出てきている。例えば、仮に５か年の構想だとして、人口動態や産業指数、高齢化率、教育、医療等のデータに対し、そこに資するサービスの寄与を構造化していく。

・そのほか、総合計画の目標に準ずるという考え方や、デジ田で使われている「地域幸福度」を利用する方法もある。

・デジタルサービスの導入は初年度より2年目以降が重要。サービスの進化が難しい状況となるため、例えば、毎年のサービス利用率を設定しそれに応じたサービス利用料を支払うという方法もある。

神尾委員長

・元々の総合計画の数値に準じるか、または、今回の帯広圏デジタル化推進協議会で全体の目標も手段も含めて記載設定していく方向なのか、事務局側の考えを改めて頂きたい。

<u>＜事務局＞</u>

・総合戦略や総合計画と別物とは考えてはいない。総合戦略、総合計画のKPIを指標として設定することも１つの案と考えている。

・1市3町の総合戦略のKPIも確認の上、デジタル化構想に生かせる項目を選択していきたい。

神尾委員長

・効果を測定するにしても国勢調査は5年に１度のため、理想とする数値を設定したとしても、精練されたデータを収集するのが難しい、とも感じる。

委員

・例えば、予算申請時に使う数字やサービス導入１年後の事業評価に使う数字など、帯広圏の政策にデジタルがどの程度寄与しているかという観点の検討も必要かと思う。つまり、デジタルサービスの進度を効果測定した方が予算を獲得しやすい面もあるのではないかと思う。

神尾委員長

・イギリスで複数年予算における研究をした事があるが、５年間で使った予算に対する政策評価と単年度予算に対する政策評価は、全く違ったものになるので、モニタリングの期間等を変更するなど検討が必要。

委員

・デジタルとＫＰＩの設定については、慎重にならざるを得ない。例えば、様々な取り組みしている中、人口の減り方が緩やかになったとしても、それにどの程度デジタルが寄与したか測定することは難しい。タイムスパン的にも、５年後を見据えたとしても検討や導入の期間を踏まえると実質は２～３年。帯広市は、全国的にみても住みやすさの満足度が高いと言われているが、それでも人口は減っている。住みやすさよりも経済環境や教育環境に左右されたりする。

神尾委員長

・デジタル戦略として貢献度をどのように測るか、また、デジタルの革新スピードとのタイムレンジの適切さなども考えていく必要あると理解した。

・ウェルビーイングとローカルハブを並立的に検討しているが、ウェルビーイングの先は「人」であることをイメージしていたが、そうではないケースも想定し指標設定をする必要があるかもしれない。

＜事務局＞

・デジタルの貢献度を測るのは難しいが、その点はある程度割り切りをし、ローカルハブは地域の活力を高めていくという位置付けとして、活力を表すパラメータの１つで人口動態を指標の一つとしてはどうかと考えている。

・また自治体ごとに住民アンケートを実施しているため、デジタル要素も追加し、実感度を測る事が出来るかと考える。

・ローカルハブとウェルビーイングはトレードオフではなく、以前の会議でドイツの事例のお話があったように、従業員が住みやすい環境を作ることで、人が根付いていくといった好循環が理想だと考えており、その辺を表す指標を設定したい。

神尾委員長

・ドイツでは、ローカルハブの目標値を定めるにあたって、取り組み前後でどれだけ良くなったかを把握するのみである。つまり、あまり細かくせず「デジタルによって変わった部分」のみを抽出する方法。

・1番大きな目標はKGI。コンセプトがローカルハブとウェルビーイングなので、圏域版総合計画のようなイメージ。実現に向けた指標としては、人口が圏域トータルで増えるとか、減り方が緩やかであり抑えられているなど、人の出入りに関する項目をKGIの1つの項目として置くのは重要。そのうえで、自律性や循環性など代表的な指標を用意しデジタル化への取り組みの進捗のアウトプットを出すのはKPIということになるのではないか。これらの要素を市民、議会、行政で判断していく形が良いと思う。

・KPIは取組期間によって5年後、10年後で目標値を変えるのもある。確実にこれというものが無ければ硬直的にならず目標のベクトルを少し変える可能性も考えておくべき。昨今の技術革新にされる分もある。

3　議題3：キャッチフレーズについて

神尾委員長

・構想のキャッチフレーズについて意見をもらいたい。

委員

・デジタルの力で「食」や「健康」の分野の発展にどのように貢献をするか、という点がキー。「教育」や「子育て支援」の環境も踏まえ「健康」であることが、豊かに暮らすための中心的なポイントであり、これに関連するキャッチフレーズとすることはどうか。

・帯広市は、道内で5番目の人口規模であるが、農業や食の部分で勢いが感じられる。先日もとかちマルシェが開催されていたが、農業や食について多くの人が関心をもっていることが感じられた。

＜神尾委員長＞

・人口規模によらない勢いや感覚、印象などは重要であり、ローカルハブのコンセプトにも馴染む。例えば、サブタイトルに勢い、飛躍、さらなる高みなどを、入れるのも良いかもしれない。

委員

・どこで利用することを想定したキャッチフレーズとするか。市民に身近に感じてもらうためにも、先に定義してからスタートした方が良いと思う。事前回答において、論点だけ書き出してみたが、例えば、市民向けに打ち出すのであれば、経験上、横文字やアルファベット系は市民から遠い印象となるため、避けた方が良いと思う。自治体や産業関係を中心に打ち出

すのであれば、DX やグリーンなどの今後の基本戦略になり得るキーワードを使ってみるのも１つではないか。様々な場面で使う事を想定するのであれば、ひと言か２ワードぐらいでスパッと言い切れると覚えてもらいやすい。

・キーワードやエッセンスは、デジタル活用な感じで考えると、人との繋がりを強調するならば「コネクティッド」や、地域発という部分であれば「グローバル」「グローカル」「パーソナライズ」などで特色を出せるのではないか。

・ウェルビーイングの１つのポイントで考えると、「共助」や「住民中心」「オプトイン」「健康寿命延伸」「ダイバーシティ」「誰一人取り残さない」がトレンド。

・十勝や帯広圏を想起させるものとしては「グリーン」や「自然」「ネイチャー」などが考えられる。他の地域と重複しないことが重要。

＜神尾委員長＞

・住民向けにローカルハブという横文字は分かり難いかもしれない。やまと言葉で「食」や「農」「健康」「世界」「直接繋がる」「市民と世界が繋がる」などはどうか。「デジタルが創る“食と健康”の世界的拠点（ハブ）：帯広圏」といった感じで、もう少しわかりやすいサブタイトルを入れるというのも考えられる。

＜委員＞

・決めるプロセスも重要。例えば、前橋市は公募しパブリックコメント実施の上決めた。首長が協議して決めるという方法も考えられる。

＜神尾委員長＞

・プロセスは検討の余地がある。プロセスやキーワードを選別し、いかに分かりやすく示すか、もうひとひねりして決めていきたい。

３　閉会

神尾委員長の発言により、会議は閉会した。要旨は以下のとおり。

神尾委員長

・分野間の連携やタスクシフト、技術進歩の考慮など踏まえたデジタル化サービスの設計を進める必要がある。

・帯広圏らしい戦略や方向性を示すため、改めて議論し、アイデアをいただきながら取り纏めを進めていきたい。

４　その他

閉会後、次回に向けた流れについて、事務局から説明し質疑は特になかった。

事務局

・次回開催は、10 月中を目途に調整する。その際に構想の原案を提示するので意見をいただきたい。

・その後は、11 月 2 日に開催予定の座長・各首長で構成する協議会において原案を固めていきたい。

以　上